



大阪国税局長賞

税金は“未来への先行投資”

金蘭千里高等学校 2年 山本 凜音

「税金はなんで払わなきゃいけないの？」

昔、子どもの頃に何気なく口にしたこの言葉に、大人たちは「社会のためだよ」と教えてくれた。でもその時の私は、「お金を取られているだけじゃないの？」と、どこか腑に落ちない気持ちを抱いていた。けれど今、その考えは大きく変わった。税金は“未来への投資”なのだと気づいたからだ。

きっかけは、大阪・関西万博だった。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。ここでは、AIによる診断支援、遠隔医療、再生医療、医療ロボットなど、いのちを守る最先端の医療技術が紹介されているらしい。私はパソナ館を訪れたのだが、そこでは、ips細胞で作られた筋肉や心臓が展示されていて、それを見た瞬間、未来の医療の力強さと可能性に心を動かされた。

しかし、こうした医療技術の研究や開発は、一朝一夕にできるものではない。長い年月と莫大な費用がかかる。その資金を支えているのが、私たちが納めている税金なのだ。国や自治体が行う研究支援や大学への補助金なども、すべて税金によって成り立っている。

これまで私は、税金といえば道路の整備や学校の運営、警察や消防、医療といった「今の生活を支えるもの」というイメージが強かった。けれど今では、税金にはもうひとつの大きな役割があると感じている。それは、「未来をつくること」。まだ実用化されていない技術や、すぐには成果が出ない基礎研究、そして次世代を育てる教育。これらにこそ税金を使う価値があると思う。つまり、税金は未来の社会を育てる“先行投資”なのだ。

私自身も、将来は医療の道に進もうと考えている。そのための教育環境にも、たくさんの税金が使われている。私は今、社会から「未来への投資」を受けている立場なのだ。だからこそ、学びを将来に活かし、医療を通じて社会に貢献することで、その投資に応えられる人になりたいと強く思う。

万博は、私たちに「未来の社会って、こうなるかもしれない」という希望のかたちを見せてくれる。そして、その未来を実現するためには、多くの人の努力と、社会全体の支え、すなわち税金が欠かせない。私たち一人ひとりが納める税金が、見えないところで未来の誰かの命や希望を支えているのだ。

税金をただ「取られるもの」と捉えてしまえば、その意味が見えにくくなり、税金に対して不快感や不信感を抱いたまま、納めることになるかもしれない。だからこそ、税金がどう使われているのか、自分の目で見て、知り、自分なりに税金の意義を考えることが大切だと思う。私は、税金とは未来に希望を託す手段であり、社会をつなぐリレーのバトンのようなものだと考える。これからも、税金が生み出す可能性を信じ、その力を未来につなげられる人になりたい。